

ネガの絆

歌咲くクラス仲間

高木 徳一



霜月十八日〈金〉の夕方は木枯らし一番が吹いた翌日で、その名残が百％存在する。

たんきとくお

中肉中背の丹木徳夫は食事処「羽衣」の暖簾をふさふさ黒々のナチュラルウェーブ髪に触れさせ、ガラス格子戸を右手に引いた。客がカウンターに一人居る。

「今晚は。大吉小学校クラス会の幹事の丹木です。本日はよろしく願います」中のあったかい空気を押し戻す様に、丹木は中音を飛ばした。

「あら、いらつしゃい。お待ち致しておりました。

こちらこそよろしく願ひ申し上げます」狸目にアイラインを施し、紺と紫を絞り込んだ様な着物を小豆色の帯で締め上げたママが片笑窪に黒子を包み、ふわっとした日本髪のを垂れた。

「お二人さんが上に見えられていますよ」そうですかと反応し、徳夫は急な木の階段を上った。二階にお邪魔するのは初めてである。二度ばかり赤

木善太に呼び出され、この店の一階のカラオケで怒鳴った事がある。上り詰めた顔の前が廊下で、直ぐの突き当たりがトイレ、右手が八畳二間続き、左手が六畳一間。徳夫は右手に二重瞼の柔和な顔

やすはぎ

を出して、幹事の安作好美に挨拶した後、その前にいる薄紫地に白の小花をあしらった着物から細い首を出した小顔と目があつた。今日はよろしく願ひ致します」「何、言ってるのよ。この女は野村美和子さんよ」「てっきり、着物姿なので店の女かと思つたんだ。美つちゃんか。全然、判んなかった」「貴方はどちら様ですか・・・」「ほら、丹木の徳ちゃんよ。優等生で足が速かった」「ええつ、あの丸顔でパンパンに太つていた徳ちゃん・・・。坊主頭しか見ていないので、ふさふさの髪では思ひ出せないのは無理ないわね」「総白髪だけど、染めているんだ」「卒業して四十八年振りの再会ですもの、判らなくて当然よね」「確か、高校時代に駅

前にある武辺勝君の中華店の二階でやったけど・・・」都合で、その時は参加出来なかったの」「そうか。高校に入ってから髪を伸ばしたからな。今回私が司会をするから、安作さんに会計をお願いするよ。会費を徴収した人をチェックし、名簿類が入ったこの封筒を渡して欲しい」「ええ、いいわよ」丸眼鏡の好美が返事をして、封筒を受け取る。見覚えのある顔、何処のお爺さんが紛れ込んで来たのかと思う顔、肥えた人、ひなびた顔、脂ぎった顔が次々と階段からヌウツと現れた。お互い、自己紹介を始めている。

「皆さん。先ず、酔わない内に会費をお支払い頂き、封筒を受け取って下さい。席は自由ですので、グルッと壁際にお座り下さい」

各人は思い思いの所に腰を落とすと、袋を開け、中の名簿と卒業写真の一・六倍の拡大コピーを食い入るように見詰め、顔をもたげ当人を探す。続けて徳夫が喋る。

「それでは、皆さん。参加予定の方が全員揃いましたので、定刻より十五分遅れましたが、昭和三十二年、西暦では一九五七年の大吉小学校六年一組のクラス会並びに一年遅れの還暦の会を開催致します。私は本日の司会を担当します丹木徳夫です。小冊子三枚目にある写真の前から四列目の右半分男性陣の一番左側です。丸坊主の卵顔で胸がパンパンに張ってます。高校から髪を伸ばしましたので、高校時代の本クラス会に参加出来なかった方は今の顔との一致が中々合わないと思います。さて、開催の発端は、昨年の中学時代の同期会兼還暦お祝い会に、風邪で一週間熱が下がらず、歳なので無理せず、残念ながら欠席してしまつた後に、幹事だった武辺君から電話で当会を開こうとの提案があつたからです。それでは、息子から習い、やつとの事でパソコンを打ち作成しました冊子の式次第に沿って会を進めて参ります。最初に不動産会社社長の赤木善太君に開会の挨拶をお願い

い致します」「僭越では御座いますが、丹木君から

のご指名で御座いますので、簡単に御挨拶申し上げます。この会は幹事の丹木君、武辺君、安作さん、貝野さんのお骨折りで聞く事が出来ました。

心から御礼申し上げます。ここに恩師の岡島千春先生がいらっしゃらないのは誠に残念であります・・」「あつ、御免なさい。先生の欠席を言うのを忘れました。後程付け加えます。どうぞ」

徳夫は来る人ごとに先生の出席の有無を聞かれ、答えていたから、済んだものと勝手に脳細胞が判断していたのだ。

「卒業以来、早や四十八年の歳月が流れ、人生の艱難辛苦を乗り越えて、お互いこうして元気に還暦を迎えられました事を素直に喜びたいと思います。今宵は童心に返って昔話や現況を楽しく話しましょう。前で煮えたぎっている鍋が美味しい内に食べてと騒いでいますので、私の挨拶を終えます」

拍手の響きが湯煙を遮る。

「引き続き、酒屋の主人の須木富一君に乾杯の音頭をお願いします」「酒を断った僕に、何故乾杯なのかは判りません。グラスの中はお茶けです。

多分医者の方丹木君が、皆さんも僕同様禁酒するか、量を減らすようにと考えての意味深な指名なのでしょう。実は十年前に胃から大出血をして辛い入院生活を過ごしたのです。皆さんもお身体には十二分に注意して下さい・・」

商店会やPTA会で赤木君らと浴びるほど飲んでいたせいだと、窓際で胡座をかく、白と黒のブチの髭を顎と頬に蓄えた武辺が茶々を入れる。「ま、後悔も込めていますけど。それでは、皆様始めご家族の皆々様の御健康と御多幸を祈念致しまして乾杯します。それでは、かんぱーい」そこかしこで、小気味よくグラスの合わせ音が暖気の中を行き交う。

来る前に三十分の余裕があったので、徳夫は駅前

大通りの須木酒店で油を売っていた。富一は父親がややボケてきて、親より先に逝くのはまずいと考え、大出血との合わせ技一本で禁酒を決意したと言う。偉いぞ、しっかりとお父さんを見送ったからなと、奥二重の富一を褒めてきた所である。

「折角の肉団子入り鍋料理が並んでいるので、グラスを傾けながらじっくりと味わって下さい。二十分位歓談にしましょう」

若い仲居を従えた女将が、両手を付き、口上を述べる。「こちらの赤木社長さんには、御鼻眞に与かっております。本日はこの近くの大吉小学校のクラス会だそうで、また還暦のお祝いとの事、誠に御芽出度う御座います。この二人が給仕を致しますので、何なりとお申し付け下さい。当店の自慢は鰻料理ですので、どうぞご賞味下さい。それではごゆりとお過ごし下さいませ」

深々とお辞儀をして、女将は引き下がった。

「白菜、人参、椎茸、里芋、白滝が程よく煮えて、

牛の肉団子も入れましょう」『びちびちギョルつてとこだな。歳は幾つ位かな』『二十三です。お注ぎしますわ。どうぞ』と、茶髪の細面の仲居が徳夫の問いにすかさず答えた。「若い顔を見てると、十歳は若返り、食欲も出てくるな』『悪かったわね。お婆ちゃん』『何言ってるんだい。前島豊乃さんはお母さんそっくりで、五歳は確実に若いよ。真つ赤なセーターに緑の上着に白いネックレスで若作りだ。そうだろ、みんな』同意の手叩きが起こった。隣同士の差しつ差されつも盛り上がり、湯気の熱さも加わり、耳朶や頬をほんのりと赤らめてゆく。

「それでは皆さん、時間が参り、アルコールも五臓六腑に染み渡り、口も滑らかになった事でしようから、名簿順に消息を訪ねていきましょう。先ず、恩師の岡島千春先生ですが、一カ月前に電話で都合を伺った所、喜んで楽しみにしているとの事。足が弱っているのですその時まで足を鍛えて行

かれるようにしたいとも・・」「へー、未だ生きていたんだ」「変な事言わないでよ」「お幾つになるのかしら」皆は口々に思い思いの言葉を乗せた。

「来年、八十歳の傘寿だそうです。一週間前には赤木君がお迎えに参りますと伝えましたが、昨日になって夜中トイレから戻る途中転んで胸を強打され、気持ちが悪えて、足も苦患で顔も萎びたこんな姿を皆さんに見せたくないとの事です。クラス会終了後、幹事が会の様子を報告に参りますと述べる、我が儘だけれど、誰にも会いたくないと言われました」「歳を重ねれば、誰だって頭が禿げたり、白髪になったり、顔皺が増えるのは当たりめえだろうよ。こうやって身回したって、歳相応や老け過ぎだつていらあな」「女心なのよ」「そうよ。若い時はお嬢さんで、知的なマスクをしていらしたから、きつとギャップに悩まれているのよ」「勝気で負けず嫌いな所があったから、余計そういうのかも・・」「丹木の話から、運悪く前日に胸

を打って、皆に会いたいと言う昂揚感がブツンと切れたんだ。そつと、先生の言いようにしてやろうよ」「青春の思い出を引きずり、何時までも教える子に対し、しゃきつとした先生でありたいんだろう」「自分らも八十位になれば、先生の気持ちが判るかも知れんな」「何、馬鹿な事言ってるの。男性はせいぜい生きても七十歳前後よ。傘寿までは到底無理無理」「それもそうだ。俺何んぞ、胃癌で手術したから、来年この世にいられるかだ」「縁でもない事、言わないで・・」

「それでは皆さん、先生には私の方から、小冊子、記念品、寄せ書き、記念写真に手紙を添えて出しておきます。あつ、そうだ。忘れるところでした。急で申し訳ないけれど、お祝いとして一万円立て替えて包んで欲しいとの事でした。参加をされるので、よろしいと言ったのですが、他のクラス会にもそうしていると申されたので引き受けました。皆さん、拡大コピーと現在の顔を見比べその

ギャップを楽しみながら、当時を思い起こし
よう。名簿一番の赤木君からどうぞ」「見事に禿げ
上がった赤木善太です。背も名簿も一番前で何を
するにもトップで、度胸が付いた様です。向水商
業高校を出て、不動産会社に十五年勤め、独立し
て不動産屋をしています。バブルの時流に乗らせ
て頂き、住宅、土地の取り引きに猫の手も借りた
い程多忙を極めました。が、バブルが弾け、事業を
縮小しています。最盛期に五十人いた従業員は今
は三分の一に減りました。倅が昨年結婚し、早く
孫の顔が見たいです」「今大問題になっている妹爪
一級建築士の耐震構造の偽造には、関係していな
かったのか」と、ギョロ目をひん剥いた黒光りの
顔の吉本力が、身を乗り出して聞く。「よせやい。
関与しているような口つ振りは。もしそうなら、
クラス会所じゃねえだろ。ま、過去の書類を調べ
上げるまでは眠れなかったがね。一切関わってない
と判ってほっとした」「大変だったのね。でも良か

ったわ」隣席の千絵が細目と共に頷きを見せた。
「そう言えば、善太は先生をよく泣かしたなあ。
入り口の戸の上に黒板消しを挟んで、開けた瞬間、
千春先生のボーイッシュな黒髪が白髪に早変わり
したもんだ。廊下でバケツを持たされ立たされて
いた。それが今じゃ、社長さんだ、偉く変身（変
心）したもんだぜ」顎髭を撫でながら、武辺は善
太を正面に見据えた。「そうよ。上げ戸の机にトノ
サマガエルを入れられて、女の子は皆、びつくり
したんだから。本当に悪がきだったわね」「俺だけ
じゃ無い。健ちゃんや勝だって一緒にやったぜ。
唯面白がったんじゃないよ。雅代のような可愛い
子の歪んだご面相を見たかっただけだ。選ばれた
と思えば、嬉しいんじゃないの」口を尖らせ、顔
を赤らめ、胡座をかいた善太が当時の悪さを言い
訳する。「まあ、屁理屈つけて」アルバムから抜け
出した様に、目鼻立ちがくつきりしたお下げ髪の
藪崎雅代が口元に笑みを浮かべる。

「この調子だと、赤穂浪士四十七士と同人数の思
い出を話し出すと、夜が明けてしまいます。何も
今日が最後と言う訳ではありません。参加者は男
性十一名、女性九名で、都合で来れなかった男性
一名、女性二名の住所録は完璧です。会いたい人
同士が連絡したり、二、三年毎にクラス会を開き
ましょう。次の飯山君の消息をご存知の方は・」
知らないなどの声が、一、三カ所からした。

あすなろの樹の如く成長著しい、眼鏡の石井伸之
が立ち上がった。「僕は出来が悪かったので、私立
の三流の奥道高校をやつとの思いで卒業しました。
そして、寿司職人、ガソリンスタンド、蕎麦屋を
渡り歩き、パチンコ店に勤めて、銭になる商売と
実感し、今ではパチンコ店を二軒持つてます。是
非遊びにきて下さい。出る台をそつと教えますか
ら。妻一人と出戻りの娘の三人暮らしです。勝君
や保夫君とは時々会いますが、その他の方とは正
に四十八年振りで、誰だか見当も付きません」

「伸ちゃんはコンパスが長くて、運動会では何時
もリレーの選手だったね」寿老人のような顔に、
程よい赤味が差した藤谷昭が喋り終えると、富一
が続く。「二両親とも背が高く、二人のお兄さんや
お姉さんも他人より頭二つ抜きん出ている巨人家
族だよな」「一番上の兄貴は家業のガラス屋を継い
で、小さい奥さんを貰った。俺のそこは十人並み
の家内だ」「バスケットボールでは、ゴール下のポ
ストブレイで何時も得点され、癪に触ったなあ」
若々しい米原莊次郎が言い放ち舌打ちをすると、
何人かがそうだったと相槌を打つ。

「フオークダンスの時、私の手をしつかり握って
くれず、軽く指先を合わせる程度だったわ」との
豊乃のキンキン声に、産だったんだと大声が響き、
爆笑となった。

大宮、小熊のその後を知る者はいない。片波は中
学の同窓会にも顔を出していないとの事。

「次の狩子猛君に電話をしたら、お兄さんが出ら

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。